加藤道夫全集 Ⅱ

加藤道夫全集　第二巻
©1983, Haruko Kato　0393-900125-3978

一九八三年四月一日第一刷発行
一九八三年五月三〇日第二刷発行

著　者――加藤道夫
発行者――清水康雄
発行所――青土社
東京都千代田区神田神保町一―二九　市瀬ビル　〒101
☎二九一―九八三一〔編集〕二九四―七八二九〔営業〕
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――美成社

加藤道夫全集Ⅱ　目次

I　評論・エッセイ　11

たわごと　12
「犬」「子供の心」そして「感激」　13
映画雑感　17
動くディスコボロス　20
雑記〈新演劇研究会第一回発表会パンフレット〉　23
雑記〈新演劇研究会第二回発表会パンフレット〉　24
ひとつの径路　25
思想座の創立に就いて　29
演劇の故郷　32
否、ハムレットは死んでいる　39
ジャン・コクトオに就いて　44
舞台幻想（序）　46
死について　62
「みごとな女」について　65
ジロウドゥの世界とアヌイュの世界　67
文五郎讃　101
アメリカ戯曲の特徴　102
ジャン・ジロウドゥと「シャイヨの狂女」　108
現代演劇の一課題　125

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

略歴と感想　127
ルーマダスと実存　128
ラジオ短評　品がほしいトンチ教室　131
ラジオ短評　旧弊一新の〝街録〟　132
ラジオ短評　凡作の放送劇　133
ラジオ短評　夢声・名人芸の香い　134
不吉の兆を孕む　135
ラジオ短評　〝子供の日〟に恐るべき証言　136
ラジオ短評　針小棒大な野球紛争　137
ラジオ短評　淋しい国会討論会　138
ラジオ短評　139
ラジオ短評　140
怒りと夢と幻　141
「我が心高原に」に就いて　143
ウィリアム・サローヤンの戯曲に就いて　145
新劇の動向　157
ホイップル氏とサローヤン　162
現代演劇における課題　165
編輯後記〈三田文学〉　168
キティ颱風について　169
モリス氏の思い出　171

新劇への不信　172
森本薫とノエル・カワード　176
編輯後記〈三田文学〉　177
畸型的社会風俗の喜劇　178
アメリカ演劇の常識性　181
〝我が心高原に〟を観て　189
自然主義悲劇の再反省　191
上演に寄せて〈サンダ・ロック〉　194
鳴海四郎君紹介　195
J・P・サルトル「墓場なき死者」　196
チェーホフ劇の感銘　197
演劇のレアリテ　199
作者の言葉〈挿話〉　201
作者の言葉〈なよたけ〉　202
戦後の岸田国士と田中千禾夫　204
演劇の変貌　206
形而上的自然主義　211
二十世紀フランス演劇概観　213
新しい芝居　覚書　225
「カリギュラ」「誤解」あとがき　233
作品展望　ジャン・ジロドウ　236

劇と詩の調和 239
「誤解」について 248
「誤解」の試み 250
「アルルの女」あとがき 251
「思い出を売る男」 作者の言葉
「新らしき演劇のために」 解説 253 254
シチュアシオンの演劇 258
詩人と学者 260
思考的人間 265
「イヴの総て」を観る 267
目に見えない怪物 269
『蠅』 訳者のことば 271
『夕鶴』によせて 272
サルトルの「悪魔と神様」 274
詩劇に就いて 285
『なよたけ』 あとがき 289
『祖国喪失』 あとがき 290
戯曲の文体について 291
美しいだけでは間にあわない 295
「聴き給え君（エクウト・モナミ）」 297
若い感受性 303

「襤褸と宝石」作者の言葉 304
芥川比呂志 305
僕の演劇遍路 307
ブランシュ・デュ・ボワと云う女 310
倉橋健君 315
『正義の人々』解説 316
高木均君 324
実存と本質 325
「加藤道夫集」あとがき 329
近藤玲子様 330
堀さんの死 331
詩人の死 332
マルセル・アシャール／鈴木力衛訳『海賊』 335
劇詩人の生成 337
カミュ『誤解』 347
「死者の書」と共に 356
松浦竹夫君 359
『四季』の友人達 360
午年の作家の感想 361
「マリアンヌの気紛れ」あとがき 362
ジャン・ジロウドゥの世界 365

年若い俳優志望の友へ　426
反省的な生活　427
「流行」ノート　428
研究生諸君に寄せる　431
四つの異色作品　432
演劇に於ける詩　435

II　覺書斷片　437

III　書簡　465

新演劇研究會當番日誌　509
新演劇研究会のこと（鳴海四郎）　510

解説（安東伸介）　617
年譜　622
参考文献　628

監修　中村真一郎
　　芥川比呂志

編集　浅利慶太
　　諏訪　正

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

加藤道夫全集 Ⅱ

I

評論・エッセイ

たわごと

院展に入って、先ず最初に考えたことは「こんなものに、金を出して損した。」と云うことであった。

はじめは、次々と絵を見て行く内に、つまらなさと、払った金に対する惜しさが一ぱいになって来て、もはや見る気もしなくなって了った。「こんな処は早く出て了った方がよい。」と、速足で、歩き抜けて行くと、最後の辺に、速水御舟と云う、亡くなった画伯の絵ばかりならべてある室があった。

「之れが先生の今年お亡くなりになる直前にお画きになったものです。」

「成程、誠に絶筆です。」白髪の老人が洋服の紳士に説明している。僕は「そうかな。」と思って二人の立去った後で、その絵をつくづくと眺めた。大きな松の向うに月がある。墨で書いた月である。「こんなうす黒い月があるかな。」としばらく見ていたが、之は最近なくなられた人が死ぬ前に書かれたものだと思うと、「人間と云うものは、何時死ぬか分らないのだから、こう云う絵でも書いて自分の面影を残しておかなければ困るんだな。」と考えた。

ただそれだけである。

しばらく先へ行くと、「どうです。真にせまって居ますね。こうじっと見ててごらんなさい。本当の火が燃えて居る様ですよ。」「本当ですな。」と二人の男がその絵に近寄ったり、遠ざかったりして一生懸命に見て居る。僕はどうも、みんなに馬鹿にされている様な気がしたので、「どれ。」とばかり、その後から行ってじっとそれを見つめた。炎の上に、沢山の虫類が、むれとんでいる絵である。「成程、火と思えば火だな。」などと負け惜みを云って、今度は出来るだけそばへ近寄った。僕の眼中はすべて真紅になった。「之が火である。」と何度も何度も見直していると、不思議にも、眼中の真赤なものがメラメラとうごいている様に感じた。どう見ても、もえ上っ

ている炎である。「此奴はすばらしい。」と二三歩さがっても、やはりメラメラと燃えている様に見える。もとの位置に戻ってもやはり同じ様である。

僕はこの時はじめて「絵はすばらしき芸術である。人の手一本に依って、実物そのままのものが生れるのだ。」と考えた。そして速水御舟と云う画伯の天才的才幹を知った。

僕はそれから、また全部の絵を同じ様に、一生懸命見直しはじめた。山あり、河あり、すべて、之真に迫って見えるのだ。うすぐろい月も、じっと見つめている内に、金色にかがやく美しい光を発している様にさえ感じられた。

「絵の真意を得たり」とばかりすっかりいい気持になって外に出た時、先ず最初に考えたことは、「絵を見るのに、あれ位の金は決して高くない。」と云うことであった。

「犬」「子供の心」そして「感激」

数十日も前から、僕の家の軒下に、ウロウロして居た、白い仔犬があった。自分が野良犬であると言うことを意識している弱身からか、家の飼犬が飯を食う時でも、唯じっと欲しそうに、傍から見ているだけであった。

初めの内はたいして気にもかけなかったが、五六日前からは、殆ど骨と皮ばかりになって、歩みも定まらぬと言う有様で、丸々と太った飼犬との対照は生の歓喜に満ちみちた幸福の一塊と、死霊の宿っている様な、やせこけた哀れな一片。下手な形容ではあるが、そう言った感じであった。僕は極端な生の喜びと不幸を見せつけられて、すっかり可哀そうになり、それからは粥の残りなど

で飯をつくって与えて居た。生気のなくなった眼で、じっと僕を見つめて、今にも失せんとしている、かすかな生命力の中から、それでもそのありったけのものを以て感謝を捧げて居る様な、かおつきは、それこそ何と言おうか。僕はキリストにでもなった様な気がした。

「何だい。こんなうすぎたない犬！」と兄貴が言う。

「そんな犬に飯などやりつけると、馴れて了って、仕様がないよ。」と母が言う。

しかし僕は、目の前から一つの生命のうごき（あんな小さな生命であったが）の消えて行くのを見殺しにすることは出来なかった。

そんなわけで、ビール箱で、寝床を作ってやったり、食物を与えてやったりして育ててやったので、大分肉附もよくなって来たのであるが、それも無駄であった。

それは、今朝、僕がまだ眼を覚さない前に、母が頼んだ犬殺しがやって来て、連れて行って了ったのだそうである。

僕は何とも言えない気持になった。それは最愛の子を失った親の気持、そのほんの一部分とでも、或は、似通って居るかも知れない気持である。

僕は窓から見えるビール箱を眺めて居る内に、ほんの一瞬間ではあったが、確かにその中にうづくまって幸福そうに寝て居る白犬の姿を認めた様な気がした。そしてヴィダーの「結婚の夜」のラスト・シーンを思い出したのである。

自分の浅墓な一本気から、愛する、而も愛し得ない乙女、マンヤの清浄な命を絶って了った小説家トニー・バレットは、冷い硝子窓を、空虚な気持で見つめて居た時、彼は真白なコネクチカットの雪の上に、死んだ筈のマンヤの姿を認めたのである。ああした気持は確かにあり得るのだと思う。

映画詩人ヴィーダーは「結婚の夜」を一篇の「うすら寒い悲劇的な冬の詩」、「而も、美しい詩」としてつくり上げたのであるが、あのラスト・シーンによって更に悲劇的な、更に美しいうるおいをつけたのである。そして恐らくヴィダー自身も、あの気持に経験があったに違いなかろう。

これは僕が少くとも形式だけは、トニイ・バレットと同じ様に窓辺に立ったままで考えた事のつもりである。しかし、しばらくすると、こんなことを考えている自分が、馬鹿々々しくなって来たので、部屋に戻ったが、何時もの平静な気持になれない事は確かだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com